

---

# お父さんハウス

長崎秋緒

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

お父さんハウス

### 【Nコード】

N0568F

### 【作者名】

長崎秋緒

### 【あらすじ】

父の仕事の都合で田舎に引っ越すことになったばかりと母は、驚きと恐怖の連続だった。

父の遺骨を納め、母は早く父の死を脇へと追いやりたいのか、しきりと冷たい飲み物がほしくないかばくに訊いてくる。

ぼくはなるべく人の少ないお店を探し、通りに沿って植えられた並木の繁りがこの暑さを防いでくれていることに感謝し、日陰を歩き母の好きそうな、こじやれたカフェを見つけ、うだる炎天下に参ってしまった、その母の歪めた顔は、ぼくをびっくりさせるほど老けて映ったことは、父の死は母にとっては良かったことなのかもしれない。

総合病院の精神科医師を辞め、開業をしたはいいが、父の『西野クリニック』は、人情味溢れ、しばしば経営という側面から外れた無計画な診療で、屋台骨というべき患者からの報酬を“ツケ”で済ます。

そんな時代にそぐわないずさんな経営は、クリニックを三年で閉めることになった。その頃から父の行動性に異常なものを感ぜられるようになっていたが、当時のぼくと母は、ただ目の前にある自分達の生活が否応なしの変化を強いられてしまったことを、父の経営力のなさからなじり、引越しまでの短い時間を親しい友達と別れを惜しみやり過ごすのに精一杯で、そんな父の予兆に気がついてあげられる余裕などなかった。

それまで住んでいた家は、生活に困るような不便さに出会う機会は何度かあったものの、その不便さを引きずらない程度のことだ。殆どで、その土地の住み心地の良さは子供ながらに感じてはいたから「引越し」という言葉が父の口から出された時のぼくの驚きは、胸の内でひどく消化の難しい複雑な感情になっていた。

農業や家畜業が中心の、S市の端の方に位置するその町に、新しい住居を親子で見学に訪れた母とぼくの第一印象は、とてもじゃないがここには住めない、という失望の思いで一致した。

居住区よりも田畑の面積が明らかに広い町は、まるで空気に濃い臭いがこびりついているみたいに、いつまでも空気が臭いが消えるということがなかった。やたらにまかれた肥料と、家畜を飼っている家から漏れてくる動物の体臭と汚物、その他様々な混ざり合わさった我慢ならない異臭で、町全体が覆われているみたいだった。

梅雨が過ぎる頃には一通りの引越しも済ませ、新しく通う中学校への手続きも終え、ぎこちなく通い始めた中学校での生活には、当初想像していたよりも、案外確執も起こさずに地元の子供たちに向かい入れられた。

転校してひと月の間に親しくなった数人の友達を真似、その地方の言葉を普段の友達との会話の中に、最初遠慮がちに、その後はしだいにあからさまな強い意識から使うようになり、一度母親の前でその話し方をした時に、隣で聴いていた父の冷静な反応からは予想がつかない程、母親が怒りだしたのには、不意をつかれたのもあって、どうして自分が叱られているのか、それが母の言葉から出てくるまでの間、ぼくは全く理解できずにいた。

「そんな汚い言葉は使わないで」

そう厳しく念を押されたぼくは、しばらくの間友達との会話にさえ方言を混じえることを止め、この地に越してくる前の言葉使いに戻っていたが、夏休みも終わり、放課後の余暇を体育大会の予行演習に費やす頃には、ぼくはもう方言を駆使しなくては、この土地の荒っぽい喋りには対抗出来なくなり、この田舎の風土においては、ぼくの話す平たんな言葉よりも、抑揚の効いた激しく強い調子で捲くし立てる地元の喋りが適していることを思い知っていたから、自然とぼくの声は大きくなり、ひび割れた感じの、母親に言わせると「本当に下品」な声色に変わっていった。

そういう調子で人付き合いに関しては、自分でもなかなか好ましい態度で、先生や近所の大人たちに、いつの間にか顔を覚えてもらい、うまくその土地に溶け込むことができていたように思う。

その後、この土地のあらゆる事において遠慮するものはなくなっ

たと感じられるほど生活に慣れてからも、脳の奥深いところに植え込まれた一つの恐怖感が、ぼくの心にはあった。

その土地には、中学校を卒業するまでの間住むことになったのだけど、とうとう最後まで慣れることが出来なかったものがある。

ぼくの家は、海から少し離れたところにあった。通学路にある防波堤のそばには、雨の降った後、道路一面に力二の死骸が広がっている。

雨水に呼び出され歩道にまで乗り出してきた力二達は、夜の間に轢かれアスファルトにこびりつき、数日経つてもひび割れた甲羅に刻まれた笑い顔が、都会育ちのぼくには恐ろしく、いつまでも笑いかける甲羅の笑顔はある夜ぼくにこんな夢を見させた。

ぼくの部屋中に力二のつぶれた死骸があつて、引き出しの中にまでそれはあり、開けてもいないのにぼくはそれを知っていて、目の覚めたぼくは、ふとんの上にもびっしり敷き詰められた力二の死骸に脅えいつまでも起き上がることができずにいた。

そのうち母が一階からぼくを呼ぶ。仕方なくふとんをめくると力ラカラとそれは床に散らばり、ぼくはそれらを爪先立ちで慎重に踏みぬよう避けながら歩き階段を降りていく。

ぼくの臆病ぶりをたくさん赤い甲羅をした力二達が笑っていた。ぼくは、今日は学校に行きたくないと母に訴えたけど、どうしても休ませてはもらえず、家を出てすぐにほらみたことかと一人呟いてみせた。

道路一面に力二の死骸が、地平線の彼方まで広がっていた。これを全部踏まないように歩いていたらどうせ授業には間に合わない、やっぱり今日は休んだ方が正解なのに。

ぼくはそれでもつま先を立て、おそろおそろ、できるだけ下を向かないよう慎重に、やっぱり引き返そうかと何度も思い返しながらも、両足は休まず動き続けていた



ぼくの家は木造平屋建ての借家。以前は小さな商店をやっていたらしく、家の半分は売り場になっていて、レジのカウンターもそのままで、お父さんは、そこでなにかしら、商売を始めるつもりらしく、ひとり店舗の改装を行っている。

お母さんは地域医療センターに精神科医の空きがあるから、素直に就職しなさいよ、と促していたが、お父さんは、もうあの仕事には就きたくないと、頑なに反対し、お母さんとの妥協の末、病院の清掃員として働きたした。

引越し当初、お父さんは庭でゴーヤの栽培を試みていた。七月から九月にかけて収穫のじきだったので、ぼくも借り出され、ぶさいくで、形もさまざまなゴーヤは我が家の主食となり、毎日のようにチャンプルーがでてきた。

卵と同じも豚肉もはきらいではなかったから、別に飽きることはなかったが、父が園芸にはまりだしてからというもの、野菜の大概はそれで賄えるようになっていた。

ここの庭の土の養分が豊富なのだろう。何を栽培しても大抵は巧く育ち、その分の食費は浮き、お母さんは喜んでいたが、そのうちお父さんは、平屋建ての造りのまずい隙間から、次々と現れる虫達を捕まえて、これを食用にできないかと言い出してから、我が家の食卓は急転換を向かえた。

まず、お父さんは畳に現れるダンゴ虫を捕まえ、フライパンで炒め始めた。これにはお母さんは激怒し、そのフライパンごと窓から放り投げてしまい、お父さんは夜中まで説教をくらっていた。

お父さんは病院の清掃員として働く傍ら、最近なじみになった中国人のチェウさんと付き合うようになり、チェウさんは、六年日本に住んでいるにしては、言葉はカタコトで、それでもお父さんとの身振り手振りのコミュニケーションはとれていて、中料理屋を営む

彼が豚の骨についたわずかな肉をそぎとって酒の肴に出している、そのどんなものでも食い物のタネに変えてやろうという貪欲さに感化され、父はナメクジの食用の研究を始めた。

ちょうど梅雨時で思いつきで行動するお父さんのことだから、ぼくは放っておいたが、いつのまにかお父さんの助手に任命された。ぼくは、なめくじの世話をするようになった。

薄暗くじめじめとした部屋の、以前店舗の物置に使われていたところをそのまま利用し、そこはお父さんの研究所みたいになった。

お母さんは陰気臭いから部屋の模様替えを強行しようとしたが、そのつどお父さんの厳しい反対に押し切られ、今は諦めの境地に至っていた。

ある日、一番風呂をしていた母が、裸のまま風呂場から飛び出してきた。少女のような叫び声がぼくには意外だったが、お父さんとおそろのおそろの浴槽を除くと、茹で上がった蛇が浮かんでいた。臭いも生臭く、つんとした感じで、その日ぼくと母はシャワーで済ませたが、お父さんは蛇風呂なんておつなもんだ、と蛇を窓から投げ捨て、蛇の出汁の出まくった浴槽に長々と浸かっていた。風呂の排水溝から時々いろんな物が出入りしてきた。

お母さんはその日から、ぼくにお風呂の掃除当番を命じ、決して一番風呂はしなくなり、ぼくやお父さんを先に入らせ、安全を確認してからそれでも、過敏になっていたお母さんはしばらく浴槽に浸かろうとはしなかった。

たまに排水溝から小さなカニが茹で上がり浮かんでいた。いたりして、だから、お母さんはますますお風呂嫌いになっていった。

平屋建ての隙間からダンゴ虫やらゲジゲジ、ムカデ、いろんな虫が我が家を訪れる。

はじめのうちはいちいち、脅えティッシュ越しではないとつかめなかったそれは、いまでは、素手でつかみ、手のひらで転がし丸まったダンゴ虫等を窓の外へと放り投げる。



お母さんは、

「早く手を洗いなさい」

そういうけど、ダンゴ虫を触ったくらいでは手を洗うのがめんどろになつていたばくはそのまま眠りに就く事もしばしばで、お母さんはますます、この田舎に越してきたのはばくにとつては間違いだつたとお父さんにやつぱり都市部に戻りましょうと説得していたが、ゴーヤの収穫期に入っていたお父さんにはそんなこと上の空で、大小形は整っていないが、味は悪くないゴーヤをお母さんに差し出す。しぶしぶ夕飯の用意を始めるお母さんがばくに、「私お父さんが怖いわ」とこぼした。

ナメクジの研究のため、ばくは学校が終わると、真っ先にナメクジ小屋へと入っていく。

母の神経症はこの頃からひどくなってきた。

部屋の影になつている箇所には、

「ゴキブリがいる」

そう幻聴を見るようになったのもこのころだった。

お父さんは相変わらず、チェウさんと食用に出来る材料を相談していた。

チェウさんは、それ以外にも、日本人の独身男性に、花嫁を斡旋することもしていた。

田舎では嫁いでくれる女性も少なく、嫁不足に困っていたところに、中国人の若くてキレイな女性を紹介する。

男性の好みにあつた女性をなるべくその要求に答えるべく、チェウさんは本国と連絡を取り合っていた。

チェウさんは中国から連れてきた従業員に日本人と変わらぬ賃金を与えていることでも、周りの日本人にも好評だった。

お父さんの話によると大抵連れてこられた中国人は日本人の半額以下の給料で働かされるのだそうで、それだけにチェウさんの決して自己利益だけではない商売のやり方には、たいした知識をもっていないばかりでも、チェウさんは良い人だというイメージがあつた。

チェウさんに斡旋されてきた中国人の女性は、日本国籍が取得できるし、田舎の嫁問題も解消できるので、一石二鳥だった。

チェウさんに紹介を受けて結婚した男性は十人を超え、ぼくの町では中国人をよく見かけるし、中国の商品を取り扱っているお店も何軒があった。

ナメクジの食用化のことだけど、お父さんが、「くらげのゼリーがあるなら、ナメクジでもいけるはずだ」と、ナメクジ調理セット？ を使い、まずメスを使い、ナメクジの糞を取り除く作業にかかった。それから、まず塩漬けにしてみようと味塩胡椒をふりかけたら、予想通り溶けてしまった。

こんどは砂糖で試そうと、お父さんは同じようにして、糞を取り除いたナメクジに砂糖をふりかけた。スプーンで半分ほど切り分けて口にして、

「意外といけるぞ、どうだ」

差し出されたスプーンを手で払いのけ、ぼくは宿題があるからといってその部屋を出て行った。

そのことをお母さんに話したら、その夜となりの部屋から夫婦喧嘩の声が聴こえてきた。そういえば、チェウさんのお店で貰ったお土産の”開口笑”というお菓子は美味しかった。ああいうのならまたチェウさんのお店にいきたいな。

### 三

ぼくが学校まで通う道筋は、できる限り田や畑の集中する場所を避けるようにしていたけれど、その日は友達の家まで迎えにいき、一緒に登校するつもりだったから、そこまでする牛舎を突っ切らなければならなかった。

牛の目の大きさがグロテスクで、ぼくは牛が好きになれなかった。横を向いているのに目だけはこちらを見ている。そんな時ぼくは下を向き、鼻をつまみそこを小走りに抜けて行く。

転校してきて初めてできた友達の幸一さんと並んで農道を歩く。前にはぼくの嫌いなタクミのグループがいた。

このタクミというバカは転校してきたばかりで何も知らないぼくに嘘のしきたりを教え、ぼくはジャージ姿で一人登校するというヘマをやらかした。騙されるぼくもどうかしているとは思いつけど、それだけではなくタクミは三年生で相撲部主将の兄の力を利用し、放課後ぼくと数人の一年生を体育館に呼び出し、バスケットゴールの真下に厚いマットを敷き、ぼくらに相撲部に入るように強要してきた。

もし入部したくなければバスケットゴールのボードからマットへ飛び降りろという。集められた一年生は全員部活動をしていない子ばかりで、相撲部と相撲部でもないタクミのグループの連中がぼくらにどちらか選べとえらそうに命令する。

ぼくは早く家に帰りたいだったので、体育館のはしごを昇り、ネットをくぐりボードへ足をかけた。

下を見ると高さがより感じられて、少しとまどったが、まわしを締めている自分の姿を空想し、それで気持ちを奮い立たせ、声を漏らさず飛び降りた。

マットに両足から落ち、しばらく仰向けになって一瞬の恐怖を思

い出し噛みしめっていると、「おい、早くどけよ」

タクミの兄がぼくに帰っていいと言った。

ぼくは言われるままに鞆を肩にかけ体育館を出て行こうとしたらタクミ達が出口を塞いでいて、「明日俺んちに来いよ」と勝手に約束をさせられ、どうせいくつもりもないから、適当に返事をして出て行こうとしたら、マットの敷いてある方が騒がしくなった。

ぼくの後に続いて飛び降りた子が、着地の勢いで、顔をひざにぶつけ鼻血をだしているのが見えた。タクミ達はすぐにマットのある方へ駆け寄っていった。その隙にぼくは体育館を出ていった。

次の日、昨日呼び出された内の一人がぼくに声をかけてきた。

「西野くんのせいで、ぼくらまでバスケットゴールから飛び降りなきゃならなくなった。誰もやらなきゃそれで済んだのに……」

ぼくはそいつの名前をまだ知らなかったから、相撲なんて興味ないし、早く家に帰りたいからやっただけだよ、とだけ言い返し、そいつをじっと見ていたら、そいつがぼくを睨み去っていった。

後で他の子をつまえて昨日の続きを訊いたら、そいつは松下というらしく、最後まで飛び降りられなくて、下から怒鳴るタクミ達に脅え、ついに泣き出してしまったそうだ。結局松下は飛び降りはやらずにすんだのに、自分の恥をぼくのせいにしやがったので、ぼくは松下とは口を聞かないように決めた。

学校が終わり、タクミがぼくの席までやってきて、取り巻きの連中に左右を挟まれるかたちで、ぼくは強制的にタクミの家に行くことになった。

タクミは簡単にいうと、勉強のできないバカで、なにかしら兄の皮を借り一年のボス？ にでもなりたいらしい。取り巻きの連中も似たようなモノだ。そんな性格だから、顔はぶさいくではないのに、クラス的女子に毛嫌いされていた。この辺は、小学校から中学校まで顔ぶれが変わることはないそうで、ぼくみたいな転校生でもなれば、誰もタクミには近づきたくないらしい。

タクミは家に向かう間ぼくにいろいろ質問してくる。前に住んで

いたところのことや、学校でのこと。都会にでも興味があるのだろうかと、優しく質問に答えていたのがいけなかった。それでタクミを調子に乗せてしまったのだ。

タクミの家は漁業をしているそうで、家の前で網を編んでいるおばあさんが、タクミの名を呼んで、ぼくは丁寧に挨拶し玄関を上がった。

タクミの部屋は二階にあつて、下の弟と同じ部屋で、二段ベッドの上をタクミが使っているそうだ。

気がついたら、取り巻きの連中はいなくて、タクミがぼくにベッドに入るように言う。

ぼくは訳が分からないまま、二段ベッドの上にのぼり、タクミも上がってきて、ぼくらは一緒のベッドで横になった。

タクミが何を考えているのか全く理解できないで、ぼくの頭は思考が麻痺したような状態で、タクミがぼくを抱きしめて、

「お前、いい匂いがするな」

背筋にもものすごい勢いで悪寒が駆け抜けていったのを感じ、ぼくは気分が悪くなり吐き出しそうになった。

ぼくの異変に気づいたタクミはぼくをベッドから追い出し、帰りしなに、「誰にも言うなよ。言ったらお前、わかってるよな。俺達に勝てると思うなよ」

そう、悪人の言う捨て台詞を言われても、こっちだってこんな屈辱を誰が他人に話せるもんか。屈辱だ、屈辱だ。男に抱きしめられるなんて、しかも嫌いな奴に

これはもう復讐するしかない。ぼくは泣きながらホモタクミのことをさらに、さらに、もっと嫌いになった自分を再確認するのだった。そして金土日の三連休前の木曜日。

ぼくは小瓶にナメクジをいっぱい入れて学校に持ってきていた。目的は簡単なこと。その日の授業はうわの空で、早く放課後が来ないかと待ち遠しくてしかたなかった。給食の終わった後を狙ってはみたが、さすがに何人かは教室に残りおしゃべりをしていたのであ

きらめた。

屈辱の日から一ヶ月待ったのは、より確実に復讐してやるため、三連休以上の休みがなければ面白いことが起きそうにないと思ったからだ。

放課後、卓球部に所属する幸一くんを見送って、ぼくは一旦教室をでて、保健室のトイレまでいってしばらく時間をつぶし、頃合を見計らってまた教室に戻ってきた。誰もいない教室は開放的な気分になせ、ぼくの興奮も増してきた。

タクミは教科書を持って帰るような奴ではないのは承知していた。タクミの机の中にはガチャガチャの人形やら、カードゲームに使うカード？　こんな小学生が遊ぶようなもん持ってるのか、と呆れながらもぼくはしっかりとタクミの机の中身を物色していった。

右上に折り目のついた答案用紙があった。めくってみると数学のテストで、十四点……。バカにする気も起こらない。

かわいそうになってきたぼくは、それでもしっかりとやることはやるのだった。

小瓶の中のカワイイナメクジの子供たちを給食の際、くすねておいたスプーンで取り出して、一匹ずつ引き出しの奥へと、放つ。自由の世界へお帰り。育ちを良くするために引き出しを水で湿らせてあげる。

だいたい二十匹ちかくのナメクジをタクミの引き出しへ移し、中身を元通りにして戻す。ちゃんと順番どおりに教科書も並べ、おもちゃの位置も元どおり、完璧。

「元気でね。月曜日に会おうぜ」

そう言い残し、ぼくはかっこよく教室を走り去るのだった。

夕飯時にお父さんが、

「寛ひろし、なんかナメクジの数が減ってないか？」

「減ってないよ。ちゃんと毎日確認してるもん。それよりお父さん、お風呂の壁にナメクジがいたんだけど、あれはお父さんの？」

お母さんは、苦い顔をする。

「それはおれのじゃないな。勝手に育ったんだな。ここは日当たりが悪いから環境がいいんだなきつと」

「毒キノコとか育てられるかな？」

「寛、いいぞ。キノコかあ、チエウさんに相談してみるかな」

「もうあの人と付き合わないでよ。わたしあの人嫌い。いかにも中国入って感じが」

お母さんは、お父さんがおかしくなったのはチエウさんの影響だ  
と知っているらしく、親切にしてくれるチエウさん一家を快く思っ  
てはいないみたいだ。

チエウさんの持つてくる野菜も、こっそり生ゴミと一緒に捨てて  
いることをぼくは知っている。大人の事情にこどもは口をはさみま  
せん。

明日から三連休。育て、育て、ナメクジ達よ。ああ、月曜日が楽  
しみすぎて、今日は眠れそうにないよ。なんだか無性に体を動かし  
たくなってきた。野山を野人のように駆けてやろうか。

## 四

休みの日、幸一くんは近所を案内してもらっていた時、浮浪者み  
たいなおっさんが近づいてきて、

「お前見かけない顔だな。どこの子だ？」

「行こう、寛くん」

幸一くんが、話しちゃだめだとぼくを引っばっていく。

おっさんはホモタクミのいところしく、本名は分からず、みんなタ  
クオジと呼んでいるのだそう。いかにも漁師らしい、日焼けした  
顔つきに酒のおいまでもなつて、あまりいい印象はつもてない、  
浮浪者のような汚らしいよれのタンクトップ姿が癪にさわった。  
タクミのおじで、タクオジらしい。そのタクオジは、ノラ犬やノ  
ラ猫を捕まえては保健所へ持っていき、たまに首輪のついた飼い犬  
やらまで、飼い主の許可なくさらっていくので、この界限でペット  
を飼っている家は、タクオジの姿を見ると急いで家の中にペットを  
隠したり、睨みをきかせ追い返したり、ひどいになるとホースで  
水をかける家もあるのだと、幸一君は自分の家の犬もタクオジにさ  
らわれそうになったのもものすごく嫌いらしい。

幸一くんは他人の悪口を言わない人だと思っていたので、タクオ  
ジはそこまでひどい奴なのだということが分かった。

タクオジ本人は、保健所にノラを一匹持つていくと幾らかのお金  
を貰えると周りに吹聴していたが、後でお母さんに訊いたらそんな  
ことないそうで、「寛、絶対にそんな人には近づいちゃダメよ」

まるでぼくを叱るようなお母さんの態度に、ぼくは勝手にタクオ  
ジをホモタクミと重ねて毛嫌いするようになった。

ある日の浜辺、タクオジが砂浜で何かを焼いているのが見えた。  
なんとなく興味が湧きタクオジの背後から寄っていくと、ボロのフ  
ライパンを火にかけていた。



フライパンの上には小さな赤いカニ達が踊り狂っていて、しだいに力尽きさらに深い赤色に変色していく。

フライパンから逃げ出そうとするカニをタクオジは、小枝の箸で押し戻す。縮こまったカニ達から漂ってくる臭いでぼくは急に気分が悪くなつて、立ちくらむおもいと、ホモタクミに抱きしめられた時に全身を覆った気持ちの悪さを思い出し、おもいきりフライパンを蹴り上げた。

「バカオジ、死ぬ、バーカ」

浜辺の階段を必死に駆け上がって、そこから振り返ると、タクオジは追いかけてこない。しゃがんだまま新聞紙の焼け、灰になり舞い上がるのをぼおっと目で追いかけるだけで、ひっくり返ったフライパンも、焼き殺されたカニ達にも無関心でいる。

どうやら本当にオカシイ奴らしい。でもそのしゃがみこみ呆けている姿はお父さんによく似ていると思った。お父さんはあんなに顔を赤く腫らしていない。都会育ちのぼくら一家は色白だから、日焼けしてもああはならない。あいつは地黒なんだ。お父さんはタクオジみたいにバカじゃない。

ぼくは寂しくなつてきて、本当は幸一くんの家遊びにいくつもりだったのを止め、引き返すことにした。

幸一君の部屋で新作の対戦ゲームをやる予定だったけど、幸一君に無断で家に帰り、心配してくれた幸一君からの電話に風邪をこじらせてしまったと答えた。

「お見舞いに行こうか？」

ぼくは即座に拒否した。風邪をうつしては申しわけないし、休み明けには直っているはずだからと付け加え、また今度遊ぶ約束をした。

お父さんの研究所のドアを開けると、その辺にいくらでも生えていそうな草が沢山あって、コーヒーマーカーとミキサーが卓上に置かれ、何をしているのかたずねてみたら、精神の活発になる、良い薬を作っているのだ、とお父さんは答えてくれた。

どろどろの液体状のものが作られ、小瓶にロートを使い流し込む。しつかりふたを閉めた後「絶対に、これを開けたりしてはいけない」と念を押され、益々好奇心の目覚めてきたぼくは、お父さんが仕事に出かけている間、研究室をくまなく探し、その瓶詰めにされた、濁った液体を見つけることに成功した。

瓶の中を嗅ぐとひどく強い臭いがして、気分が悪くなりそうだったので、それでも何かの役に立ちそうだと考え、少量を拝借して別の小瓶におすそ分けしてもらった。お父さんには内緒で。

お父さんは他にもこの田舎の地域になんとか“光”を繋げて、ネット経由で、海外から種子を買い、それを育てることを始めた。酒に酔った時、

「アムスの賞を取ることが目標なんだ」そう、ぼくには意味の分からない言葉を口走り、その草は鼻にかかる刺激は強かったが、とてもいいにおいが、心まで落ち着かせなくさせ、しばらくその場にじっと立っていると、自然に意識が朦朧としてきた。それに追従して興奮があり、無性に行動的になった。

お父さんは室内を真っ暗にして、蛍光灯の明かりを、その植物に当て、だいたい四ヶ月ほどで育つそうで、ぼくはそのお父さんの研究室を密かに「お父さんハウス栽培の場」と名づけていた。たまにその草の匂いをこっそり嗅いで、ふんわりと楽しい気分にさせてくれるそれは生活に欠かせないほど密着した習慣になり、ぼくは時々その草をすり鉢で液状にしたり、ベランダに干して乾燥したものを粉末状にしてスポーツドリンクと一緒に飲むようになった。

試験前の追い込みには重宝し、ぼくは一夜漬けでも、つねに学年の十番以内の成績を維持することができていた。

前にいた学校よりもここは学力的には劣っていたこともあり、ぼくは勉強のできる子という扱いになり、クラスの女子とも打ち解けるきっかけに宿題を手伝ったりしてあげていたら、いつの間にかぼくはクラスの男子の数人に恨みをかけていて、こどもじみた嫌がらせを受けるようになっていた。

下駄箱のスリッパがなくなっていたり、雨の日は傘が決まって盗まれるようになった。

だいたいの目星はついているのだが、証拠がなかったし、問い詰めるためのシミュレーションにはいつも抜け道が見つかり、もつと確実に追い込むような理屈を考えていたら、その犯人は、ぼくが全く抵抗を示さない臆病者だと思ったのか、大胆な行動にでるようになった。

ある日、体育授業の前の休み時間に着替えをしようとしたら、スポートバックの中に確かに前日の夜から入っていたはずの体操着がない。音楽の授業が二時限目にあり、教室の移動があったので、たぶんその際に行動を起こしたのだろう。

それを予想済みのぼくは、鞆にもう一着体操着を用意していたのを、なんでもないう装いで着替え始めた。その間クラス中の生徒の表情の変化を探すべく、なるべく気づかれないう慎重に、窓ガラス越しに教室全体のクラスメイト達の中にぼくを見ているものがないかと目を配っていた。

松下が窓ガラス越しにぼくの方を見ているのが分かった。他には女子の異性の体に抱く好奇心の眼差しがあり、ぼくは堂々とトランクス姿を披露してやった。

クラスで真面目といわれていた、初井<sup>はつ井</sup>さんがまじまじと男子の着替え姿を見つめていたのに驚かされた。女にもそういった性への好奇心があることをその日ぼくは知った。理想の中の初井さんは遠くへ行つてしまい、残念な気持ちになった。

その日は体育館でバスケットの予定だったので、バスケの苦手なぼくは時々体育館の倉庫に隠れ授業の終わりまで跳び箱の間に隠れやり過ごしたりするようになっていたけど、その日はうまく二部屋先の視聴覚室に身を隠し、人気のなくなったのを確かめ、教室の松下の机を調べ始めた。

さすがに机の中には何も見つけられず、バックの中も探してみたけど、ぼくの体操着はなかった。まさかと思いつつゴミ箱をあさっ

てみたが、ない。

ぼくは見当違いをしていたのだろうか、一度考えを整理するために自分の席に座り、ホモタクミの可能性も考えられるから、念の為にタクミの机も調べた。ナメクジ騒動で休み明け大騒ぎになったクラス中の生徒達の慌てぶりが思い出され、あの時タクミの机から移動の範囲を隣の席まで伸ばしていたナメクジ達の被害にあった他のクラスメイトには良心の呵責を覚えていた。

ナメクジ騒動についてタクミはぼくの仕業だとうすうす感づいてはいるはずだと警戒していたら、ぼくの想像を超える鈍感さだったタクミ達は、あのバスケットゴールからの飛び降りで、最後まで残された松下の仕業だと決め付け、松下は放課後タクミのグループに焼却炉の人気のないところに連れて行かれるのを幸一くんが目撃していて、ぼくに教えてくれた。それで、また松下がぼくを逆恨みしたのでは、と考えるようになったのだ。

まさか焼却炉に放り込まれてはいないよな、とぼくは授業中の他の教室を前かがみで通り、体育館とは反対の焼却炉まで向かった。

焼却炉までの間には自転車置き場があつて、そこでふと、松下が自転車通学だったことを思い出し、松下の名前が書かれているものを探し、前かごにビニールの袋を見つけた。

中にはぼくのゼッケンのついた体操着があつた。このまま体操着を持っていくと、明らかにぼくが見つけたことに松下は気づくだろう。そこで、その体操着を犠牲にし、代わりにぼくは松下の自転車のタイヤの前後輪に穴を開けることにした。でも、道具がない。筆箱の中には美術の時間に配られた小刀こがたながはいっている。今から教室まで戻るのはさすがにリスクが高いと踏んだぼくは、ベルのうわぶたを取り外し、音が鳴らないようにしてやった。ついでにチェーンもはずしておいた。手が油まみれになるのは承知のうえで、それでもチェーンのはずれた自転車を松下が見つけどう対応するのか興味があつた。

油まみれの手を、自転車のサドルで拭きながら、他にできそうな

ことはないかと考えていたら、お父さんが最近栽培していた“草”のことが思い浮かび、ちよつとした実験台に松下を利用してやろうと考えた。

体操着はまた買ってもらえばいいやと忘れることにし、ぼくはこつそりと保健室に向かい、体調不良を訴え休ませてもらうことにした。保健の先生から、担任に連絡が入り、ぼくは給食の時間を待たずして、早退させてもらうことになった。

保健室で書いてもらった早退届けを担当のいる職員室で渡し、気分の悪い演技をする。

担任は普段のぼくの真面目な態度を知っていたから、すぐにそれを受け取り、ちゃんと病院で診てもらうようにと念を押し、ぼくは額をおさえたり、ちよつと咳き込んでみたりして、職員室を後にした。下駄箱にはちゃんと靴がある。下駄箱の名前をはったシールが剥がされてからだいぶ経つ。それも中途半端に西野の西が斜めに剥がされていて、汚いな、どうせならキレイに剥がしてくれたら良かったのに。そういうのは嫌がらせの最低限のマナーだと、ぼくは定義づけていた。

前に隠された靴は傘立ての奥に押し込められてあるのをクラスの女子が教えてくれ、なんとかスリッパで下校することを逃れることができた。

タクミ達か、松下がやったのかは知らないが、とりあえずはらいせにタクミの靴に彫刻刀で穴を開けてやった。

家に帰るとお父さんは、もう仕事から戻ってきていた。

「寛、今度の休み、山にきのこ狩りにでかけるぞ。チェウさんの案内で食用になるやつをとりに行くから、これ呼んで予習しておきなさい」

ぼくはきのこ図鑑を手渡され、食べられるきのこよりも、毒性の高いきのこを重点的に記憶に留めるよう努めた。

「お父さん。もう医者には戻らないの？」

今になってどうしてそんなことを訊くのかというように目で、お

父さんはぼくを見つめる。

「クラスの連中がね、お父さんは変人だっていうんだよ。あいつらの親よりもお父さんのほうが断然頭がいいのに。それがいやなんだよ。ねえ、精神科医に戻ってよ」

聞き耳を立てていたお母さんがとなりの部屋からやってきて、洗濯物を手に、

「ほら、あなた、寛が学校で窮屈な思いをしてるじゃないの、わたし言っただでしょう？」

わたしだって、ご近所から変な目で見られるし、どうして医師免許をもっているのに清掃員なんかおやりになっっているんですかなんて質問されて、わたしいつも答えに困るのよ」

お父さんは黙ってぼく達の言葉を聞き、まるで、患者にでも語りかけるような口調で言った。

「もう少し様子をみてから考えさせてはもらえないかな。おれにはゆっくり自己の半生を省みる時間が必要なんだ。ゆっくりとした時間の中で、もう一度精気を蓄えたいんだ」

お母さんは何も反論せずに、黙って洗濯物をたたむ作業にかかる。ぼくも手伝わされる。

お父さんが“ハウス”に籠ってから、

「あの人、いったい何を育ててるの？ そんなにお金になりそうな植物なの？ 寛はお父さんから何か聞かされているの？」

そう質問責めにされ、ぼくにもお父さんの栽培しているものがないのかは分からないけど、多分高値で売れるものに違いないよ。

お母さんは高値という言葉に反応し、それ以上質問することはなかった。心なしか、嬉しそうな期待感を漂わせていた。

お父さんが眠るのを見計らってその葉をぼくは失敬しようと、その為の計画を、洗濯物を積みながらイメージの中で予行練習を繰り返していた。

## 五

チエウさんは食用のキノコと毒性のあるものとの区別ができるので、ぼくは適当につかんだものを確認してもらい、図鑑をめくり正しいのかどうかをまた確認する。ベニテングタケがほしかったから、お父さん達には内緒で探してはいたけど、なかなか都合よくは生えていない。

ぼく達は、家の裏庭にある獣道すらないような足場の悪い山の斜面を登っている。お父さんとチエウさんが、キノコ狩りのついでに山菜もとっている。ぼくはベニテングタケがポピュラーな合法ドラッグだと図鑑でしってから無性にそれを食べてみたいと思うようになった。幻覚に酩酊する感覚が病みつきになっていたからいろんなものを試したかったけど、結局目当てのベニテングタケは見つけられず、ぼくは名も分からない図鑑にも載っていない白くて傘にイボイボした感触のある不思議なキノコをおみやげに持ち帰ることにした。

その夜はキノコ鍋をうちで行うことになり、お父さんがチエウさんも誘ったけど、お母さんのただならぬ殺気を感じ取ったのか、チエウさんは籠かこいっぱいのキノコを持って足早に帰っていった。

夜遅く、ぼくは白いキノコの使い道を考えていた。自分で食べてみることも視野に入れてはいたけどやっぱりためられ、クラスの連中の誰かで実験してやることに決めた。

ある日の給食の時間。ぼくは給食当番だった。タクミはあの時以来ぼくに興味を失ったらしく、未だに何であんなことされたのか理解に困っていたけど、もうぼくに構わないでくれるならそれも忘れたことにしてやることに決めていた。

それでも、いざ実験台にする人を見ると、ぼくは自然とタクミ達が松下かしか思い浮かばなかった。そういう時はどうしても嫌い

なやつにしか気持ちが向かわない。それに逆らい全く関係のないクラスメイトをえじきにできる奴がきつと無差別殺人なんてやれるのだと思った。

ぼくにはその先に行く度胸は無かった。苦肉の結論で、四人にそれぞれ白いキノコを与えてみることにした。

給食の一ヶ月分の献立をみて、一番適当なものを探すとカレーにすることにした。味が複雑だし、多少変な味がしても相殺できるくらいの強い味の食べ物だから、きつと大丈夫だろうとたかをくくっていた。

白いキノコは日干しにしたものを、やすりで粉末状にしていた。後はどうやってあいつらだけのお椀に忍び込ませるかが仮題だったが、いくら考えても名案が浮かばず、鍋に全部混ぜることにした。自分にもなにかしらの症状が顕れることは覚悟のうえだった。むしろ皆で体験できる期待の方が勝っていた。

給食が始まって、誰もカレーの味に違和感を訴えない。あれ、量が足りなかったのかな、と、さすがにクラス分の鍋に一本分のキノコでは足りなかったかとあきらめていたら、クラスの男子の一人が、「これなんか変な味しないか？」となりで席をとっている女の子に話しかけているのが聴こえた。女の子は自分のカレーをスプーンですくい食べる。なんにも変な味なんてしないと流す。ぼくは安堵する。鍋の混ぜ方がいい加減だったから、必ず誰か固まった部分を食することになるだろうと考えていた。

初井さんが急に青ざめた顔をして、たまらず教室を飛び出して行った。それはぼくにとっては予想外で、気のある初井さんにその害が向けられてしまった不慮の出来事に良心が咎めた。

松下の腹がきゅるきゅると音を立て、教室内に聴こえるほど大きな音を立てた。たまらず松下もトイレに駆け込んでいった。それを見ていたタクミ連中はすぐさま松下の後をおつていった。

トイレの個室で下痢をしている松下の音にタクミ達のいじめは創造性を駆り立て、トイレのドア越しにどんと扉を叩き、「おい



お前今うんこしてんだろ。臭いよ。松下のうんこは臭いつて皆に言いふらしてやるから」とバカにした笑いをトイレの個室に響かせる。松下はドア越しにそれだけはやめてくれと懇願し、新発売のゲームソフトを貸すからなんとか皆には内緒にしてくれと頼み込んだ。「だめだね。それじゃあ対等じゃない」

じゃあ、何をすればいいんだよ。うちにあるものといったら、ゲーム関係とネットの情報収集の蓄積だけだと松下は落ち込んで、言った。

それに対するタクミ達の答えはひどく残酷なもので、彼に金銭の要求をしてきた。

さすがにばくもそんな卑怯なやり方には反対派だったから、不本意ながら、松下の擁護に回ることに決めた。

松下の弱点をまず知る必要が在る。ぼくが真剣に自分のことを心配しているのだと勘違いした松下は、全てを話してくれた。過去にぼくに辛く当たったことも謝ってくれた。

そうして話をしてみると、思っていたほどには松下は嫌な奴ではなかった。ただ皮肉家でマイナー思考だったから、ぼくの書く妥協した、客と時代の流れに沿った文章が嫌いだと打ち明けられた。以前国語の時間に書いた小論文でA評価を受けたことを松下は律儀に覚えていた。

そして、互いの誤解が解けても鍋のカレーに混入されたキノコの粉末は取り除くことはできない、いつそやけになって鍋ごとひっくりかえしてやるうかともかんがえたけど、どうにも不自然な行為にしかみられない。結局被害に遭ったのはタクミ達を含む八人だけで体にも免疫でも持っているのか、タクミだけは違和感すらかんじていなかった。取り巻きの3人は苦痛を訴え授業中何度もトイレに駆け込んでいた。ぼくはそれとなくクラスの連中に赤痢ではないのかと囁き、思惑通り三人のあだ名は赤痢三兄弟とよばれるようになった。結局ぼくは幻覚を楽しむことはできなかったが、クラスの数人に新しい快楽を教えることが嬉しかった。また機会があれば植

物混入をやるうと誓った。

## 六

お父さんが清掃員の仕事をいつの間にかやめていて、新たに診療所を開くことをぼくら家族に告げた母の喜びようはいまもわすれられない。

研究室に使っていた部屋を改築して畳みの部屋に変えた。お父さんは以前から研究していた薬草の知識を利用し、ホメオパシーに心酔するようになった。

ハーネマンという人が提唱した、類似したものは類似したものを治す、という類似の法則によると、毒を以って毒を制的なやり方は日本ではなじみが薄く、でもイギリス、フランスでは保健の対象にまでなっていて、一般に受け入れられている治療法らしい。

小さな砂糖粒に物質を溶かしたさまざまなレメディーと呼ばれるものをつくり、その種類は数えきれないほどあり、レメディーによる治療は、体に少しの毒物を入れることになる。毒物に対し体の抵抗が起これると、自己治癒力が高められ、病気が治るとされてはいるが、ホメオパシーには科学的根拠が希薄な為に学者からは敬遠されているともあった。

ぼくもレメディーには懐疑的な態度を崩さなかったが、お父さんの解説した、ホメオパシーセミナーはおもに高齢者に指示され、一年もせずしてお父さんはホメオパシーの第一人者として崇められるようになった。

まるで変な宗教のように毎週のようにうちを訪れる年寄りが、お父さんに高額な治療費を支払っていた。

我が家の収入はホメオパシー信者によって高額になり、借家をでて、一軒家を建築する話もちあがるほど荒稼ぎし、その田舎ではホメオパシーが一大ブームとなった。田舎の年寄りには人柄が良く、騙すには格好の獲物だった、とのちにお父さんが教えてくれた。

パソコンに疎いじいさんばあさんのためにお父さんはいろいろア

ドバイスをして、特に必要も無いのに光通信に加入させた。その度に町の電気屋と連携し高額のパソコンを売りつけ、高いプロバイダーのセットに加入させ、ディベートを受け取っていたみたいだ。

じいさん達からひっきりなしにくだらな質問の電話があり、お父さんは的を少しはずした解決策を提案する。しばらくしてまた別の不具合が起けると、その人たちから謝礼を受け取るようになった。その頃のお父さんは金儲けに夢中で、いままで肩身の狭い思いをしていた家族内での自分の立場を取り戻すために必死にそんなことをしていたように思える。

お父さんは独学でレメディーを作り、それを一見高級そうな薬瓶に入れて、売り出した。レメディーには危ない面もあり、例えばトリカブトから摂取されるものもある。リン酸鉄は喉や風邪に効くと効能が謳われていたし、水銀が口内炎や歯茎の炎症、口臭に効くともあった。それはとても鵜呑みにできるものではなくて、いくら海外で認知されていようと、ぼくはホメオパシーに対しては慎重な態度を崩さないよう注意していた。

お父さんのホメオパシーの会には高齢者が多く、お父さんの作るのがわしいレメディーを彼らは疑わずに、高い金を支払い買っていく。我が家の経済状況は急激に上昇し、お父さんも近所ではちょっとした有名人のような扱いを受けるようになり、地方局の取材も受けるようになった。

お母さんは見直したお父さんにとっても優しくなり、夜中にお父さんとお母さんのセックスをする回数も、一ヶ月に一回あるかないかだったのが、周一回に増えていた。ぼくはふすま越しにお母さんの喘ぎ声を聴かされ、その頃からセックスというものに強い興味が湧くようになった。ぼくもクラスの女子の誰でもいいから口説き落として初体験を済ませたいと考えるようになった。思えばあれがぼくの性への目覚めのきっかけだったように思われる。

## 七・

ぼくは初井さんと付き合うようになった。まわりの冷やかしもあったけど、関係はそこそこまくいっていた。

ぼくはセックスに興味があったから、早くそれをやってみたかった。でも初井さんはぼくの頼みをきいてはくれなかった。そんな時別のクラスの女子に告白された。

富野さんというバスケット部の女子だった。富野さんは積極的で、受け身な初井さんとは違って、ぼくのようなセックスへの好奇心を隠そうともしなかったので、富野さんと度々密会するようになった。

密会場所は富野さんの自宅で、母親と二人暮らしの富野さんの家は散らかっていた。富野さんのお母さんは片付けのへたくそな人らしく、本当は両親の離婚の時お父さんに引き取ってもらいたかったのだと、涙ながらにうったえ、ぼくに抱きついてくる。いつものように富野さんと、畳の上に敷いたかたいふとんで裸になる。富野さんに口でももらうのは気持ちよかった。ぼくも富野さんの舌を舐めてあげる。ぼく達はもう数え切れないくらい何度もしていた。一度の密会で五回したこともあった。ぼくのペニスはじんと痛みがあったけど、またしばらくすると富野さんの体が恋しくなった。

初井さんとも付き合いは続いていたけど、一向に進展は無かった。ぼくと初井さんの関係を承知の上でも、ぼくのことを許してくれる富野さんはとても都合の良い存在だった。

富野さんとセックスをしているからこそ、初井さんの前では真面目でいられたし、初井さんもそんなぼくを好きだといってくれた。

富野さんに時々、もう初井さんとはやったのかと訊かれる事があったけど、ぼくはまだだとこたええると、富野さんは勝ち誇ったようにまたぼくのペニスをにぎり、初井さんとは在学中には無理かもねと笑った。

タクミ達が捕まった。オレオレ詐欺を、近所の一人暮らしのおばあさん宅へ行い、振込み先の口座がタクミのいとこで、十九歳になる土木作業員のものであったため、すぐにばれ、タクミ達のいなくなった学校は居心地がよくなった。

お父さんは地元の名物おじさんになっていて、怪しげな治療を行う注意人物にもなっていた。ぼくとお母さんもお父さんの汚名の恩恵を受け、学校でぼくに近づいてくる人はほとんどいなくなった。

借家を捨て、ぼく達は一戸建ての家を建てそこに住むことになった。お母さんは喜んで、お父さんのレメディー作りに協力し、二人でいろんな植物を採ってきては、新しいレメディーを開発していた。ある日、お父さんのセミナーの一員である初井さんのお母さんがトリカブトの毒で死んでしまった。レメディーは薄めるほど効果があるといわれているもので、おそらく初井さんのお母さんは誤った療法をしてしまったに違いない。それでもお父さんは警察に連れて行かれ、自然にセミナーは衰退に向かった。会員も次々と退会し、後に残ったのは一戸建てのローンと、町中の軽蔑の眼差しだけだった。

ぼくは初井さんから別れを告げられた。仕方ないことだと思っただが、富野さんにまで距離を置かれるようになると、自然と怒りはお父さんの方に向けられた。あつさりと出所することができたお父さんにぼくは死んでしまえと怒鳴ってしまった。お父さんは前よりもふさぎ込み、お母さんの機嫌も悪く、ぼくまで八つ当たりで叱られる回数が増えた。

そんな時、ぼくは草で作ったクスリで気晴らしをすることが日課となっていたが、依存が強くて、日に二三回吸わないと、指先がふるえ、神経が高ぶるようになった。そういう時に学校の連中にいろんなイタズラをしかけ、気をまぎらわせていた。

年の暮れ、ビル清掃のアルバイトをしていたお父さんが一晩帰ってこなかった。お父さんが家を空けることは珍しくも無くなってい

たので、ぼくもお母さんもとくに気にもしていなかったけど、次の朝早く警察からの電話で起こされ、お父さんが溝に自転車ごと落ちて死んでいたことを知らされた。溝の水位は浅く、凍死だった。酔っ払って自転車で家に帰ってくる途中の事故ということで片付けられた。ぼくはその際に初めて死亡診断書を見た。殴り書きで死亡の原因を読んだ。そこに書かれている文字はとても簡潔であつさりとしていることに驚いた。

中学三年の中頃ぼくはお母さんと都会に戻るようになった。中途半端な転校で受験直前ということもあり、厳しい毎日だったけど、知らないうちにぼくは体力がついていて、特にマラソンが速くなっていて、転校したばかりのマラソン大会で何の部活もしていないのに十三位だった。ぼくはいきなりの注目を集め、それでぼくを目の敵にする連中には人知れずの制裁を加えてやった。

お母さんは狭いアパートでホメオパシーセミナーを始め、ご近所の暇な主婦達を言葉巧みに丸め込んで会員にした。お父さんのやり方をすっかり覚えていたお母さんはそれで毎月の生活費とぼくの授業料を稼ぎ、おかげでぼくは大学受験も許してもらった。

今、ぼくは大学一年生の夏を送っている。お父さんの遺骨をこちらの納骨堂に移し終えたばかりだ。骨を収めるのにも金がかかると母は愚痴り、「死んでまで迷惑かける人ね」

とぼくに何か冷たいものでも飲んで帰ろう、とまた同じことを繰り返す。

ぼくは覚せい剤の栽培をしていて学費くらいなら自分で払える稼ぎはあったけど、母が忙しく働いているほうが嫌なことを考える暇もなく、結果的に精神はたくましくなると分かっていたから、ぼくは架空の口座をつくり、時々その口座からお金を引き落とし同じゼミの連中と飲みに行ったり、旅行に行つて楽しんでた。母にはアルバイトをしていると嘘をつき、ぼくは仲間のいる、皆で借りた六畳一間のアパートで暇をつぶしていた。

恋人もいたが、どれが本当に一番なのか分からずに付き合っていて、うるさいことをいう女から切り捨てていった。不思議とぼくは女がよってきた。でもそれはぼくにはなくぼくが栽培しているものの強烈な魅惑のほうだということも自覚してはいた。でもそれで構わないと思った。来る人拒まず、去る人追わずでこの先も生きていこうと割り切っていた。



## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0568f/>

---

お父さんハウス

2011年9月11日03時23分発行